

## 明清江南市鎮と郷村の都市化について

その他のタイトル	Cities and Urbanization of Villages in Jiangnan (江南) District under Ming (明) and Qing (清) Dynasties
著者	樊樹志, 松浦章
雑誌名	史泉
巻	65
ページ	59-63
発行年	1987-03-31
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10112/00025985">http://hdl.handle.net/10112/00025985</a>

# 明清江南市鎮と郷村の都市化について

樊樹志

〔解説〕 松浦章

山根幸夫教授は『中国史研究入門』の中で、明代江南の市鎮研究について、鎮志等を丹念に分析することによって鎮の実態を究明する必要があることを指摘されている。

この問題について、筆者は既に鎮志・市志・里志・村志等を分析し、『明清江南市鎮研究』としてまとめたところである。しかし、この研究は未だ出版されていないため、ここにその一端を紹介し、諸賢の教示を仰ぐ次第である。

## 一 草市から市鎮へ

市鎮とは即ち市と鎮である。それは農村の都市化の過程の結果であった。唐代には草市あるいは村市があり、宋代において、商品経済の発達にともない草市が年々増加する傾向にあった。

その発展の結果、住民の居住する地理的実体を形成したのであり、それがすなわち原基市場である。この原基市場は市と呼ばれ、あるいは墟、あるいは歩、あるいは埠と、または店、場、集等々と呼ばれた。

鎮は市より一層大きく、人口も市よりはるかに多かつた。鎮は小都市あるいは半都市であつて、中間市場町であつた。

明代において江南市鎮は急速に発達し、蘇州府には市鎮が七二箇所もあり、松江府は四四、杭州府は五二、嘉興府は四一、湖州府は二二箇所もあつた。

清代以来、江南の市鎮はさらに発達し続け、乾隆時代において蘇州府では市鎮が一一三九にも達し、松江府では一一六にも達したのである。

市鎮の発展史の中で、明代の萬曆時代（一五七三～一六一九）と清代の乾隆時代（一七三六～一七九五）とが最も榮えており、

萬曆から乾隆にかけて江南の市鎮は急速に発達し、兩時代は市鎮の発達における高潮期であつた。

## 二 市鎮の規模と構造

市の戸数は約数百戸あつたが、小さい市の戸数は数十戸から十余戸であり、大きい市は小鎮と同等の規模であつた。

たとえば楓橋市、月城市、黃溪市、鶴王市などは規模の大きい市であつて、これらの市の經濟は、江南においてかなり重要な地位を占めていたのである。

鎮の戸数は約数千戸あり、大鎮の戸数は万戸程あつた。たとえば、南潯鎮は「烟火万家」とされ、盛沢鎮は「居民万有余戸」とあり、烏青鎮は「烟火万家」であり、王江涇鎮は「烟火万家」であり、濮院鎮は「人可万余家」であつた。

住民数千戸の鎮は多く見られ、たとえば黎里鎮、章練塘鎮、江湾鎮、朱涇鎮、朱家角鎮、同里鎮、臨平鎮、平望鎮、黃涇鎮、震沢鎮などがある。

市鎮の町の構造は一般的に十字港型、丁字港型、一河二街型の三種類に分けることができる。

十字港型とは水路が十字に交差しその交差した水路を中心に市鎮が形成されるもので、これには、南潯鎮、濮院鎮、王江涇鎮、黃涇鎮、南翔鎮、梅李鎮などがある。

丁字港型とは水路が丁字に交差し、その交差点に市鎮を形成するもので、これには塘栖鎮や王店鎮などがある。

一河二街型とは水路をはさんだ兩岸に市鎮を形成するもので、黃渡鎮や硤石鎮などがこれに該当する。

市鎮は市街すなわち町並だけでなく、四郷と呼ばれる周辺地域をも含んでいる。その四郷は市鎮の東郷、西郷、南郷、北郷であり、それを含めた市鎮の面積はかなり大きく、たとえば、塘栖鎮の四郷は東郷から西郷まで約六〇里（三〇キロ）あり、同里鎮の場合は四郷が五三村、西唐市の四郷は一九村、西徐市は三四村もあつたのである。

## 三 市鎮とその機能

江南長江デルタ地帯の農業や手工業及び商業等は極めて発達していたため、市鎮の分布密度は非常に高い。

ある市鎮と別の市鎮とのあいだの距離は六里（三キロ）、二里（六キロ）、一八里（九キロ）、二四里（一二キロ）、三六里（二八キロ）等とあるが、一般的には市鎮間の距離は約二四里（一二キロ）程である。

県の商業の中心地、即ち市場は県市と呼ばれている。しかし、この県市と県の周辺の市鎮と商業・手工業の面においてどちらが盛んであるかと言えば、もちろん市鎮の方が盛んで

あつた。

一般的に、県は政治の中心地であり、他方市鎮は経済の中心地であつた。

市鎮には作坊と呼ばれた工場や、牙行や商店も集中していたため、市鎮の経済は県の経済よりはるかに発達していたのである。

たとえば、蘇州府呉江県の県の戸数は二千余戸あつたが、呉江県の経済の中心地はその県市には無く、盛沢鎮や平望鎮や震沢鎮などの市鎮にあつたのである。

盛沢鎮は絹織物業の生産の中心地であり、その上、絹織物の交易の中心地となつていたため、「凡邑中所産、皆聚于盛沢鎮」と言われていたのである。<sup>④</sup>

平望鎮は米穀の取引の中心地であつた。長江下流デルタ地域には三大米穀市場があり、即ち楓橋市と長安鎮とそれに平望鎮であつた。このため平望鎮は小楓橋と呼ばれ、小長安とも呼ばれていたのである。

震沢鎮は蚕糸の取引の中心地であつて、これは南潯鎮に次ぐ蚕糸の交易の中心地であつた。

これらの市鎮が無ければ、呉江県の経済活動もあり得なかつたのである。

市鎮と市鎮との間の経済関係も非常に発達し、たとえば盛沢鎮の絹織物業の原料が少ないため、蚕糸などを他域から搬

入し、それを加工して、他地域に搬出していった。その取引の対象となつたのは、嘉善、平湖、新市、洲錢、石門、桐郷、王店、濮院、新篁、沈蕩、溧水、木瀆等の市鎮であつた。

江南市鎮が広く分布していたのは、各市鎮が專業化していたためである。市鎮の規模が最も大きかつたのは糸絹業を專業とする市鎮と綿布業を專業とする市鎮の二種類である。この他に、米穀業、交通業、塩業、漁業、編織業、竹木山貨業、窯業、鑄造業、刺繡業を專業とする九種類の市鎮が見られるのである。

#### 四 市鎮と鄉村の都市化

江南地域において市鎮は極めて重要であり、農村の都市化にとつても市鎮は極めて重要である。

長江下流デルタにおいて、大規模な市鎮の規模は県より一層大きく、その経済地位は県よりもはるかに重要である。

たとえば、南潯鎮は市街が「南北七里、東西三里、周圍十里」あつた。同鎮は湖州府の最も大きい蚕糸の取引市場となつていたため諺語には「湖州整個城、不及南潯半個鎮」と言われていたのである。<sup>⑤</sup>

烏青鎮は市街が周圍一八里（九キロ）であるのに対し、明代の湖州城と嘉興城は周圍が一二里（六キロ）にすぎなかつたの

である。

市鎮の中には後に県治即ち県の役人の駐在地となったものがある。たとえば、當湖鎮は平湖県の県治となり、魏塘鎮は嘉善県の県治となり、唐行鎮は青浦県の県治となり、鳳鳴市は崇徳県の県治となり、朱涇鎮は金山県の県治となり、硤石鎮は海寧県の県治となったのである。

以上の事実から、市鎮が既に県の規模と機能を有していたと言える。

## 五 結 論

上述の考察によつて、結論を述べてみたい。

明清時代において、市鎮は経済の中心地として、その地位が県よりはるかに高かったと言えるであろう。さらに、市鎮は郷村の都市化を反映していたのである。このため、江南の都市経済を研究するためには、江南市鎮の研究は欠くことができないと言えるであろう。

### 註

① 山根幸夫編『中国史研究入門』（山川出版社、一九八三年九月）下、明代、社会・経済の都市の項（四九―五〇頁）参照。

② G・W・スキナー著『中国農村の市場・社会構造』（今井清一等

訳）法律文化社、一九七九年。

斯波義信「宋代江南の村市と廟市」（『東洋学報』第四四卷一―二、一九六一年）、同「中国中近世の都市と農村」（『近世都市の比較史的研究』、大阪大学文学部共同研究論集第一輯、一九八二年）。

③ 咸豊『南潯鎮志』卷一、疆域。民国『南潯志』卷二、公署。

乾隆『盛湖志』卷上、沿革。乾隆『烏青鎮志』卷二、形勢。

宣統『聞川志稿』卷一、沿革。民国『濮院鎮志』卷一、疆域。

④ 乾隆『吳江縣志』卷四、鎮市村。同上書、卷五、物産。

⑤ 劉大鈞著『吳興農村經濟』上海文瑞印書局、一九三八年。

### 〔解説〕

ここに上梓した「明清江南市鎮と郷村の都市化について」は、中国上海の復旦大学歴史系副教授であり、一九八六年六月八日より十二月二日まで、関西大学交換教授として来日された樊樹志氏の『明清江南市鎮研究』（未刊）の概要である。樊氏は一九三七年に浙江省湖州に生れられ、一九六二年に処女論文「明清漕運述略」（『學術月刊』一九六二年第十期）を発表されて以来、一貫して明清時代の社会経済史の研究、とりわけ土地問題の研究に精力的に取り組んで来られた。

その研究の過程で、都市経済と郷村経済の中に立つ市鎮の役割の重要性を明らかにする必要があるとされ、近年、市鎮研究に意欲的に取り組まれている。同氏の市鎮研究関係の論

文の内、既に発表されたものとして次のものがある。

「論明清蘇松嘉湖農家經營的商品化」、『中国古代史論叢』  
一九八二年第一期。

「明代江南農業經濟的新變化」、『歷史教學問題』一九八  
三年第一期。

「明代江南市鎮研究」、『明史研究論叢』第二輯、一九八  
三年六月。

「明清時代の濮院鎮」、『江海學刊』一九八五年第三期。

「十一至十七世紀江南農業經濟的發展——傳統經濟結構  
突破的區域性考察——」、『中國封建社會經濟結構研究』

所収、中國社會科學出版社、一九八五年四月。

があり、その他、刊行準備中のものとして、

「明代浙江省鎮分布与結構」、『歷史地理』第五輯。  
がある。

樊氏の『明清時代における江南市鎮』の研究方法は、上海  
市図書館、復旦大学図書館に所蔵されている明清時代から民  
国時代におよぶ江南各地の總志をはじめとして、府志、県志、  
鎮志、さらに我国の研究者にとって利用困難な里志、村志を  
博搜された資料にもとづく、極めて実証的な研究である。

さらに、樊氏は中国の研究者に数々見られる先学研究を無  
視するという態度で無く、広く世界の江南市鎮研究者の業績  
を踏まえ、その上で、同氏が収集された史料に拠って論を展

開するという、ごく当然と言えば当然であるが、このような  
研究方法にもとづいて綿密に論述されたものである。

ここに紹介した論文は、同氏が上海におられる時、将来の  
来日にそなえ約二か年に涉って独習された日本語で著された  
原稿をもとに僭越ながら筆者が手を加え、同氏の了解のもと  
に上梓したものである。

この論文は樊氏の研究の概要の極一部であるが、氏の研究  
方法、研究姿勢が如実に示されていると同時に、これまで我  
国でも臆気に理解されていた明清時代の江南市鎮の状況が明  
確になったと言えるであろう。

中国史を理解する上で、一般に中国でも、日本でも、北・  
南と大まかな地理区分によつてその地域の特質を理解してき  
たが、今回の樊氏の研究により江南デルタ地域の經濟構造が  
詳細になり、その機能が多岐におよんでいたことが明らかと  
なった。さらに換言すれば、樊氏は明清時代の社會經濟史研  
究者のみならず、中国史を研究する者にとって、簡単に地域  
の特質を論じることの困難さを指摘されたと言える。

以上の意味からも、樊氏の論文は我国の研究者にとつても  
有益と考え上梓したのであるが、その詳細は今後、樊氏が発  
表される『明清江南市鎮研究』の刊行に待ちたい。

(関西大学助教授 松浦 章)